力、潔、そして順子

前川　美和

一、プロローグ

ここは堺にある市営団地。同じ顔をした五階建てのアパートが道路の両側に列をなしている。団地の中には子どもたちのために、小さな公園がところどころに作られていた。夏休み前の夕方、公園に植えられたケヤキの木からセミたちの声が一定のリズムで響いていた。公園にはブランコが二つと滑り台、それから、高さの異なる赤、青、黄の三つの鉄棒がくっついて並んでいる。この団地は建てられて三十年近くになるので、入居者も高齢化が進み、若い世代はほとんど住まなくなってしまった。出ていく人も多く、空いた部屋には追募集で比較的若い家族が入っていた。

五時半頃、公園には子どもが三人いた。一番年かさの力は小学校の三年生、続いて二年生の潔、そして、まだ保育園に通っている順子だ。三人は年齢も性格も違うのだが、同じ棟で、後から入居した組ということで、よく一緒に遊んでいた。

力はブランコに乗ると、そのまま青い空に飛んで行けとばかりに、体が水平になるくらい勢いよく漕いだ。潔は順子のブランコを押してやる。強く押すと、声を上げて喜ぶ順子を妹を見るような目で見守る。力がブランコから飛び降りて、鉄棒に走った。順子も慌ててブランコを捨てて、力を追う。幼い順子には、ボスは力だからついて行かなくてはという気持ちがあるらしい。潔はそんな順子を見ると、なんとなく寂しくなる。三人は鉄棒に足をかけて、ぶら下がる。順子のオカッパにした髪が逆さまになって、地面についている。三人はしばらく逆さまの世界を眺める。三人とも逆さまの世界にあこがれる。現実と違う世界があれば…と。

喉の渇いた三人は水飲み場を目指す。一番乗りは力、次は順子。潔は飲み口に背の届かない順子を抱っこしてやる。噴水のように出し過ぎたり、小さく凹んでしまったりして、なかなか順子の口に入らない。順子に気のすむまで水を飲ませ、自分も飲んだので、蛇口を締めていると、力が「貸せ！」と水を高く出し、水鉄砲のようにして、潔と順子を狙った。順子はキャッキャッと笑っていたが、潔は

「そんなことしたら、もったいないよ。みんなが飲むための水だよ」と力をたしなめた。

「へっ！　誰も見てへん！　怒られへん。潔はいい子ちゃんやからな」

力は潔をチラッと見ただけで、水を出しっぱなしにして得意げだ。

「あっ、毛虫！」

突然順子が叫んだ。順子の指差す方を見ると、風に飛ばされてきたのか、鮮やかな黄緑色の毛虫がモゾモゾと歩いている。力はそれを見つけると、走って行って、足で踏みつけた。順子も力の真似をして踏んでいる。

「やめろよ。毛虫だって生きているんだよ。殺したら、かわいそうじゃないか」

潔は日ごろから母に言われていることを力に向かって投げつけた。

「でもよ、潔。おまえ、ゴキブリ見つけても殺さへんのか？　蚊が腕にとまっててても、叩かへんのかよ」

「それは…」
「ゴキブリにだって、蚊にだって命はあるんや。ゴキブリは殺してもええけど、毛虫はあかんのか？　それって、おかしいやろ？」
　力は中途半端な正義感をちらつかせる潔を嘲笑った。
　夕焼けが鉛色に代わっても、三人は帰ろうとしない。潔が順子に話しかける。
「順ちゃん、お母さん、もう帰ってるんだろ？」
「うん。でも、家におじさん、来てる」
「お父さんじゃなくて、おじさん？」
「うん。順子のうち、お父さんいないの。お母さんだけ。おじさんはお母さんの働いてるスーパーのお友達なんやって」
「ふうん、そうか。力んとこ、きょうお父さんいるの？」
「ああ、きのう夜遅く帰ってきたみたいで、今まだ寝てる。俺の父ちゃん、トラック乗ってるやろ。遠くまでいろんなものを運んでるさかい、毎日は家にいてへんねん。顔見んの一週間に二日くらいやな。家にいるときは大体酒飲んで寝てるんや。寝ててくれたらええんやけど、目を覚ましたら殴るんや。兄ちゃんたちや俺や、母ちゃんまで。殴ったり蹴ったりするんや」
「どうして？」
「分からん。何も悪いことしてへんのに、目が合っただけで殴られるんや。そやから、父ちゃんいるときは、みんなビクビクしてんねん。潔んとこは父ちゃん病気やからええな。殴ったりせえへんやろ」
「どうしていいんだよ。お父さん、ずっと寝てばかりいるんだよ。お母さん、朝から晩まで働いてるよ。すごく疲れた顔してる」
「母ちゃん、何してるんやった？」
「駅前の美容室で働いてるんだ。だから、帰るのいつも八時、回るよ」
「そうか。俺んちも順子のとこも、おまえんとこも、なんだか大変やな」
　三人は薄暗くなった公園の滑り台に座って、自分たちの現実に思いを馳せていた。幼いながらも、各々の状況を受け入れるしかないことが分かっているので、自然と口が重くなった。
　潔の姉がやってきて、三人に声をかけた。
「もう暗くなっちゃったよ。みんな早くおうちに帰らないとね」
　三人は腰を上げると、小さな胸に少し覚悟を宿し、三十九棟のそれぞれの我が家に帰って行った。

　それから、二か月ほどして、力の母親が三人の男の子を置いて家出した。力が八歳、征が十歳、茂が十一歳のことだった。そのすぐあと力一家は父親のトラックにわずかばかりの家財道具を積んで、逃げるように引っ越していった。
　潔のところも、半年後に父親が死んだ。それを機に母親の実家のある田辺に転居した。
　順子だけは母親と一緒に団地に住み続けることになった。

二、力

天王寺界隈に移ってきた力一家だったが、料理や洗濯など家事をする人もなく、三人の男の子は汚れた服を何日も着ていたし、風呂にもめったに入らないせいか、薄汚れた色が身についてしまった。父親は働いているのかいないのか、月に一、二度顔を見せ、いくらかの金を置くと、子どもたちのすがりつくような視線を尻目に、出て行くのだった。兄弟はその金でスーパーやコンビニで弁当やカップ麺、パンやジュースを買って来ては食べ散らかした。食べ物など十分買えないときは、万引きをするようになり、征と茂は中学生になると、同級生からカツアゲまがいのことを平気でした。追い出されるように中学を卒業した後は、進学も就職もできないまま、フラフラしていたが、生活していくためにはお金が必要になる。二人は不良仲間からバイクは金になるとの情報を得て、駅前などに違法駐車してあるバイクを盗んで、ツテを頼りに売りに行った。いい金になったので、二人は盗みに精を出した。ある日、いつも盗難バイクを買ってくれる店のオーナーが代金の代わりに覚醒剤をくれた。一度経験して病み付きになった二人は、それからは覚醒剤欲しさにバイクを盗むようになり、オーナーの奴隷と化した。手練手管のオーナーにとって、十六、七の子どもを操るのは赤子の手を捻るようなものだったのだろう。結局、征と茂はヤクザの下っ端になり、覚醒剤をさばく手伝いをさせられることになった。その頃には父親が兄弟のまえに姿を見せることはなくなり、征と茂は覚醒剤がらみで少年院に入ったり出たりを繰り返し、いつのまにか家族はバラバラになってしまった。父親も兄たちも寄り付かなくなった家に一人残された形の力は、自力で生きるしかなかった。中学を卒業してからは、就職担当の先生に紹介してもらった小さなプリント工場で、ストッキングにいろいろな模様をつける仕事をしていたが、毎日おばさんたちに囲まれ、ストッキングの山と格闘する生活に嫌気がさして、一年足らずでやめてしまった。しかし、仕事がなくなると、即生活に困った。街中でアルバイトを募集している店に片っ端から当たってみたが、中卒ではなかなか雇ってもらえなかった。幸い、力は上背もあって、ガタいがよかったので、体力仕事の引っ越し業や酒屋にバイトとして入ることができた。ただ、飽きっぽくて、コツコツ努力するタイプではなかったので、一か月から半年くらいのペースで職を転々とした。ある夜バイト探しに疲れ切って、たまたま入った駅裏の小さな酒場で飲みすぎて眠ってしまった。まだ幼さの残る寝顔を見て、不憫に思ったのか、酒場のママは力の生い立ちや過去など詮索もせず、彼をバーテン兼雑用係として、住み込みで雇ってくれた。力の母親くらいの年のママは、力に生き別れの自分の息子の面影を見たのかもしれない。

力は十九になったばかりだった。

三、潔

潔たちはしばらく田辺の母親の実家で暮らしていたが、母は父の保険金を元手に、古い小さな美容室を買い取った。建物と内装に少し手を入れて、アットホームな感じの小ざっぱりとした店にリフォームし、アシスタントの女の子も一人雇い、心機一転して働き始めた。それと前後して、一家は実家を出て、その美容室の二階で生活することにした。母は二人の子供を育てるために、故郷でしっかり根を張ろうと一生懸命だった。毎日それほどたくさんの客は来なかったが、口コミで実家の近所の人たちや元同級生が来てくれた。丁寧な仕事ぶりも評価されて、リピーターや新しいお客さんも増えてきて、母子三人なんと

かやっていけるようになった。
　姉は高校を出ると、美容師の専門学校で技術を身につけ、母を助けて働くようになった。潔は高校を卒業したら、地元で働き口を見つけて、家計を助けようと思っていたが、母と姉が「潔だけは大学に行ってほしい。学費や生活費はわたしたち二人がなんとかするから。奨学金制度もあるし、しっかり何が勉強したいか考えてみて」と進学を勧めた。潔は初めて自分の将来について真剣に考えた。そして、「教育」というものの大切さに思い至った。
「無知」は他人はおろか自分自身も傷つけてしまうことがあるということを、身近な友達に起きた不幸な出来事やテレビのニュースから学んだ。危険なもの、つまり、毒物や薬を摂取しない知識、さらに、危険なこと、見知らぬ人とネットを通じて情報交換したり、安易に性交渉を持つことを避ける常識などは、子どものころから、はっきりと結果の実態を示して教えなければならないと思う。また、知識があっても、高潔な魂がなければ、建設的な還元はできない。知識を利用し人をだまして、金を得ようとする卑劣な人間に成り果ててしまう。正しい知識を伝達し、高潔な精神を培う「教育」に携わる仕事がしたいと思った。
　潔は母と姉に、教師になるために教育学部を目指したいと自分の決意を伝えた。自分の夢の実現と母と姉の期待に応えるため、潔は残りの高校時代を勉強に費やした。塾や予備校には通わず、分からないところは、放課後学校の先生を捕まえて教えてもらった。どの先生も「おっ！　また来たな。きょうは何だ？」と面倒がらずに潔が理解するまで根気よく教えてくれた。その甲斐あって、潔は現役で大阪の国立大学の教育学部に合格することができた。
　潔、十八歳の春のことだった。

四、順子

　団地にとどまった順子は、男に依存するだらしない母親の生きざまを見て育った。母親は職場で知り合った、金や地位のありそうな人と関係を持ち、二、三年付き合っては、手切れ金をもらって別れた。スーパーで働いているときは店長と、弁当屋の時は馴染みの客になった町工場の社長と、クリーニング店では、そこの主人と不倫関係になったのだ。男に金品を貢がせて、そこそこの生活をしてきたが、四十も半ばを過ぎ、自慢の容色も衰えを隠せない。不摂生の生活のツケが回ってきたのか、肌の張りが失われ、目の下にはクマが貼りついている。
　そんな母親を疎ましく感じながら、順子自身はというと、母を反面教師にして頑張ろうとはせず、勉強にも部活にも積極的に取り組むことはなかった。テストの点数はいつも及第点ギリギリだったし、高校で入ったテニス部もラケットやスコートなどを一式揃えたにもかかわらず、二か月でやめてしまった。スマホつながりの友達はいるが、信頼しているわけではないので、明るく元気な自分を作り上げてチャットしているだけで、本心を見せたことなんて皆無だった。母親ゆずりのパッチリとした目とスラリとした足を持っているので、中学のころから男子によく声をかけられたが、容姿につられて寄ってくる男の軽さが見えてしまって、付き合う気にもなれなかった。自分のふがいなさを母親のせいにしてしまうのは簡単だけれど、そうじゃないことくらいは順子自身にもよく分かっていた。

クラブをやめると、ひまな時間を持て余すようになった順子はバイトを探した。あまり家の近くで働くのは嫌だったので、三駅ほど離れたところにあるコンビニで放課後や週末、働き始めた。

順子、十六歳の初夏であった。

五、力と順子の再会

順子がコンビニでバイトを始めて、一年が経った。今ではコンビニの多岐に渡る業務は一通りなんでもこなせるようになり、店長にも頼りにされていた。順子は他のパートのおばさんより気が利くし、仕事の段取りもよく、動きに無駄もなかった。

「順ちゃん、いてくれて助かるよ。主要戦力だな。時給、アップしないとな」

「わあ、うれしい！　やる気、出ちゃうな」

などと、店長に調子を合わせてはいるが、ケチな店長のことだから、時給をあげるといっても、二十円止まりであることは容易に想像がついた。

その時、若い男が入ってきて、カウンターに大きな荷物をドンと載せて、ぶっきらぼうに言った。

「宅急便！」

「はい。この紙に記入してください」

所定の紙とボールペンを渡した。客が記入している間に、順子は荷物の大きさと重さを測り、送り先の住所を入力し、あとは送り主の名前などを書き込むペン先を目で追っていると、「城ノ内力」という文字に行き当たった。

「えっ？　力、力、なの？」

思わず大きな声を上げた順子を、その男は怪訝そうに見つめ、視線をネームプレートに移した。「川合順子」

「おまえ、順子か？　団地の？」

「そうよ。覚えてた？　今でもあの団地に住んでるのよ」

「へえ」

二人は今を表す匂いを嗅ぎ取ろうとするように、まじまじとお互いに観察し合った。

順子はたくましく成長した力の体全体から、負のオーラが出ているように感じてゾクッとした。一方、力は女らしくきれいになった順子を眩しそうに眺めるのだった。それからは、力がたびたびコンビニによるようになり、順子のバイトが終わる時間に待ち合わせて、一緒に過ごすことが重なった。

「力のお母さんは、あれっきり？」

「そうや。音沙汰なしや。酒飲んで暴力をふるうおやじに愛想尽かすんはわかるけど、俺らまだ小学生やったんやで。自分がおらんようになったらどうなるか普通想像するよな。なんで俺らも連れて行ってくれへんかったんやろって恨んだわ」

「おばちゃん、もうギリギリやったんとちがう？　逃げ出したい一心で、他のことは何も考えられへんかったんやろ」

「俺らだって逃げ出したかったわ。もしかしたら、おかん、男と一緒やったかもしれん」

「おじちゃんやお兄ちゃんたちは？」

「おやじはいつのまにかおらんようになったわ。兄貴らは今刑務所に入ってる」
「何か悪いことしたん？」
「あのな、俺ら小学生の時から世話してくれる大人、だれもおらんかったんや。金だってないし、生き延びるためにはなんでもしたよ。カツアゲ、万引き、窃盗、挙句の果てに兄貴らは覚醒剤にまで手を出してしもた」
「えっ、覚醒剤？」
「そうや。それで捕まったんや」
「力はどうしてたん？　力も覚醒剤、やったん？」
「俺は覚醒剤にははまらんかったけど、兄貴の真似して、いろいろやってきたわ。仕方ないやろ？」
「仕事は？」
「中卒やから金になるような仕事はないわ。今はバーテンみたいなことしてるけどな。順子の方はどうなん？　母ちゃん、元気か？」
「相変わらずよ。男に媚売って小遣いもらってるわ。もう見かけで男を落せる年やなくなってるのに。何も変えようとしないし、自分自身も変わろうとしない」
「人間って変わらないもんかもな。うちの親父もおふくろが出て行った後も全然変わらんかったし、兄貴らも刑務所から出てきても何も変わらん。いろんな辛いこと経験したら、人間って優しくなるとかいうけど、どうなんやろな」
「わたしらだって、変われるんやろか。母とは違った生き方、できるんやろか」
「さあな。それは俺ら次第ってことやろな」
「自分次第…か」
「順子、おまえ、団地出て、俺の今住んでるバーの二階で一緒に暮らせへんか？」
「力と一緒やったら、安心やわ。そやけど、それって、結婚するってことなん？」
「結婚は今、ちょっと無理や。順子が大人になって、俺もしっかり稼げるようになってからやな」
「そう…。団地の今の生活から抜け出せるんやったらええかな。ずっとお母さんから離れたいって思ってたし」
「今度バイトいつ休み？」
「あさって」
「じゃ、あさって夕方四時、あの公園で待ってるよ」
「分かった」
　次の日、母親がスーパーで買ってきた出来合いの総菜で夕食を済ませ、片付け終わるのを待って、順子が口を開いた。
「わたし、家、出るわ。昔よく遊んでた力、覚えてる？　偶然バイト先で会って、ちょくちょく会ってたんやけど。力が一緒に住もうって言ってくれたんよ」
「あんたまだ高校生やろ。何考えてるん？一緒に住むって、結婚もせんとか？」
「結婚はわたしが大人になってからやって。高校もおもしろないし、力と一緒にいたいんよ」
「力？　ああ、トラックに乗ってた父ちゃんにいつも殴られてた男の子か？　そんな子と一緒に暮らしても、幸せになれんで。殴られるんがおちや。親から虐待された子は虐待す

るようになるって言うやんか。すさんだ生活してた人間はなかなか幸せになれへんよ。せめて高校くらい卒業せんと、仕事も見つからんよ」
「わたしらの生活はすさんでないとでも言うつもり？　もう決めたんや。力は小さい時から優しかった」
「優しかったんは潔ちゃんやろ？」
「力はいつも強かったわ。お母さんもわたしがおらんほうが都合がええのと違う？　そろそろしっかりした男、捕まえやんと老後がみじめになるよ」
「あんたはそんな憎まれ口叩くけど、お母ちゃんはお母ちゃんなりに頑張ってきたんや。何の取り柄も能力もない女が一人で子どもを育てるって大変やったんやで。あんたには専門学校行って、何か手に職つけてほしいって思ってる。それから、きちんとした仕事についた真面目な人と結婚して、幸せになってほしいんや。力はまじめに働いてるんか？　本当にあんたのこと大切にしてくれるんか？」
「力もあれからいろいろ苦労したみたい。一人ぼっちで…。今は仕事もしてるし、心配せんでええよ」
「家、出て行かんでも、付き合えるやろ？」
「力のそばにいてあげたいんよ。力と二人で新しい生活始めたい」
「力との生活はきつい生活やろ。貧しい暮らしって残酷なもんやで。人間、堕ちていくんや。みすみす娘をそんなとこにやるなんて、できへん！」
「お母さん、わたしの最初で最後の我儘やと思って許してほしい」
「そない言うんやったら、やってみるしかないな。そやけど、何かあったら、我慢せんと帰ってくるんやで。お母ちゃん、ずっとここに…」
　最後の方は涙で聞き取れなかった。母はすっとタンスの引き出しを開けて、奥の方から茶封筒を取り出した。
「これはいざというときのために置いてる現金や。五十万ある。少ないけど、何かの足しになるやろ？　持って行き！　力には内緒にしときや。あんたのために使いや」
「ありがとう。お母さんも要るのに」
「一人生きてくのに、そんなに金、要らんよ。いつ行くんや？」
「あしたの夕方。力が迎えに来てくれる」
「お母ちゃん、仕事行ってる間に行ってしまうんやな。まあ、そのほうがええわ」
「心配せんといて。力と二人で頑張るわ。お母さんも年やし、体に気を付けてな」
　母の生き方に共鳴はできないが、母は順子にとってかけがえのない唯一の肉親だ。女手一つで育ててくれた恩を思うと感謝の気持ちと寂しさで涙があふれてきた。その夜、順子は母と布団を並べて眠った。

六、力と順子の暮らし

　秋風が吹きぬける小さな公園の色あせたブランコに力は座っていた。その後ろ姿は逞しいのに頼りなげで、順子は愛しさがこみ上げてきた。そっと近づいて後ろから抱きしめると、力は後ろを向いたまま、順子の手をギュッと握って、自分の胸に押し付けた。順子は今日からこの人と一緒なんだと思うと、心も体も温かいもので満たされていくようだった。

「行こうか」
「うん」
二人は赤い軽自動車に乗り込むと、力の働いているバーに急いだ。バーのドアを開けると、カウンターにいた四十過ぎの女が金色の大きなピアスを揺らしながら、顔をあげ、力と順子を見た。順子は女に下から上まで舐めるように見つめられ、値踏みされているような嫌な気分になった。その視線にこの女と力のただならぬ関係が見て取れた。
「この子は順子。俺の妹や。しばらく二階においてやってほしいんや」
「あんたに妹がいたなんて初耳やな」
「俺ら、小学生の時母親に捨てられてから、父親にしょっちゅう殴られてたんや。見かねた親戚が引き取ってくれたんやけど、俺はそっから逃げ出したんや。そこの息子らがいけ好かんヤツやったんや。それ以来こいつには会えへんかったけど、この前たまたま入ったコンビニで再会したんや。こいつも親戚の家で肩身の狭い思いしてるみたいやったから、連れてきたんや」
「そうなんか。二人とも苦労したんやな」
女は自分も子供を捨てた過去を思い出し、湿っぽい声を出した。順子を見る目にもいたわりが加わったようだった。
「そんな事情やったら、しばらく置いたげるけど、二人でしっかりこれからのこと考えたほうがええな。いつまでもこんなとこ、おったらあかんやろ」
女は二人の目を交互に見ながら、諭すように言うと、
「きちんと火の始末と戸締りしてから寝てな」とくぎを刺して、重い体を引きずるように出て行った。
「力、嘘うまいやん」
「半分以上ほんとのことや。生き延びるためには嘘も必要や。だまされる方がバカなんだよ。そんなヤツは苦労の足りない甘ちゃんさ」
邪魔者のいなくなった二人は抱き合って長いキスをした。もつれるように二階に上がり、力の汗のにおいのするベッドで一つになった。順子はただ力にしがみついていた。力の後を追いかけていた幼いころの自分を思い出しながら、力のなすがままに体を開き、これがわたしの望んでいた未来なんだと自分の心に言い聞かせていた。
順子は力と一緒に暮らすようになってからも、前から働いているコンビニにバイクで通っていた。バイクだと、十分足らずで行けるし、慣れた職場を変えたくなかったからだ。その日はバイトの子が一人突然休んだので、十二時まで店長と二人で回さなければならなくなった。九時半ごろ客がひっきりなしに入ってきて忙しかったが、十時を過ぎると、パッタリと来なくなった。コンビニには一日の中で客足の途絶える時間帯というものがある。魔の時間帯かなと思いつつ、客が誰もいないのを確かめて、順子は残業のことを力に知らせておこうと奥に入った。急いでメイルしていると、いきなり店長が後ろから抱きついてきた。彼は百八十センチもあるでっぷりとした大男だ。前を向かされて、キスされそうになったので、ひっぱたいたら、本気で顔をはたかれて、ぶっ飛んだ。頭がボーッとして、口の中に血のにおいが広がった。逃げなくてはと心は焦るのに、立ち上がることすらできなかった。店長は順子の肌にぴったりとくっついたジーンズを脱がせようと躍起になっている。中年男が薄くなった頭に汗をかきながら、不器用にジーンズを引きずり下ろそうと

しているのを虚ろな目で眺めていた順子は、ハッと我に返り、悲鳴を上げた。店長は気を失っているとばかり思っていた順子が声を出したので、パニックになった。順子の口を塞ごうと体を起こしたひょうしに、頭を棚にぶつけた。呻いている男を突き飛ばして、順子は店内に逃げた。ちょうどそのとき、力が店に飛び込んできた。中途半端なメイルが届いたので、胸騒ぎがして駆けつけたのだ。順子の様子を見て、すべてを瞬時に理解した力は、奥から顔を出した店長に詰め寄った。

「俺の妹に何をしたんだ？」

「こ、これは合意だよ。二人でちょっと楽しもうと思っただけだよ。なあ、君、ずっとここで働きたいんだろ？　高校中退じゃ働くところなんてないよ」

「何、言ってるんだ。あんた、妹の顔、見てみろよ。口が切れてるし、頬が腫れてるぜ。警察、読んではっきりさせようよ。こんなコンビニ、すぐにでも辞めてやるさ」

「警察？」

「当たり前だろ。従業員を殴ってレイプしようとしたんだろ？　それとも、奥さんに知らせようか？　あんた、子持ちだよな」

「ち、ちょっと待ってくれ。金で解決できないか？　ここに今日の売り上げ三十万ほどある」

「三十万？　バカにしてるんか。裁判になったら、どんだけ取られると思う？　一千万は覚悟せなあかんで。こっちも裁判とかなったら、妹を見せ物にすることになるから、かわいそうやし、そうやな、三百万で今日のことは忘れてやるよ」

「三百万？　そんな金、ここにはないよ」

「じゃ、待っててやるから、かき集めて持ってきなよ。早く行け！」

店長は転がるように店を飛び出していった。力は順子に近づいて、心配そうに顔を覗き込んだ。

「大丈夫か？　何かされたんか？」

「張り飛ばされたとき唇、切っただけ。でも、あいつ大きいから、あぶなかったわ」

「痛そうやな。歯は折れてないのか？」

「歯は何ともないわ。あいつ、お金持って来るかな？」

「持って来るさ。失うもの多いからな」

二人でコンビニの商品を物色して、袋に詰めていると、店長が金を手に戻ってきた。ゆっくりと三百万数え終えた力は

「確かに三百万、受け取ったわ。餞別にここの商品、ちょっともらって行くわ。変な色気出してやんと商売頑張らなあかんで。百メートルほど先に新しいコンビニ、できるみたいやで。ほなな」

と言い捨てて、順子と店を出て行った。

バーに帰ると、ママが青い顔をして、待っていた。

「順ちゃん、大丈夫やったん？」

「殴られたけど、危機一髪、やられへんかったみたいや」

「よかった。あらら、口から血出てるし、ほっぺたに手形ついてるで。消毒せんと。順ちゃん、怖かったやろ」

「張り飛ばされて、ボーッとしてしもて…。力、あっ、お兄ちゃんが来てくれへんかった

ら、どうなってたか」
　ママは順子の世話を焼きながら、ポツリと言った。
「あんたら、やっぱり兄妹と違うやろ？」
「えっ」
「幼馴染ってとこかな。今は男と女」
　顔を見合わせる二人。
「しばらくっていう話やったしな。落ち着き先が見つかってからでええから、ここ、出て行ってくれるか？　二人のためにもその方がええんと違う？　まだ若いんやし、二人とも働けるんやし、もっとまともな仕事、探したら？」
　力はいきなりママを羽交い絞めにして、カウンターの上のボトルを割って、それをママの首に押し当ててすごんだ。
「舐めてんのか。はい、出ていきますとでも言うと思たんか。俺らみたいな中卒、忙しい時期、安い時給で働かされて、暇になったらポイや。なんぼ稼げると思う？　週六日、目いっぱい働いても、月十二、三万ってとこや。現実は厳しいんや」
「外食のチェーン店で一生懸命働いて店長になった人とかおるやろ？」
「真面目に働くの、あほくさいし…。金持ってたら、株転がすだけで百万単位のもうけがあるらしいやんか」
「仕方ないやろ。うちらは金ないんやから。コツコツ働くしか」
「そんなん、俺は嫌なんや。ここ出て行ってやるけど、ただじゃ出て行かん。この店の土地と建物の権利書、出してもらおうか」
「何言うてんの？　この店はうちが身を粉にして働いて貯めたお金で手に入れた店や。なんであんたみたいに若いのに額に汗するの嫌がるようなろくでなしに渡さなあかんのよ」
「世の中理不尽なんや。俺みたいなろくでなしを店に入れてしもたあんたがバカなんや。はよ、出せや」
「ここに置いてるわけないやろ。家の金庫にしまってるわ」
「ほな、一緒に行こうや、あんたの家」
「力、やめてよ」
「順子は黙ってろ！　俺ら行くとこないし、頼りになるのは金だけやろ。取れるもんはなんでも取るんや」
「でも、ママには世話になったし」
「うるさい！　ガムテープ、二階のテレビの上にあるから、持って来い」
　力はガムテープでママの口を塞ぎ、両手を後ろで縛り上げた。
「順子、このテープ持って、お前も付いてこい！」
　力はガムテープを順子に持たせ、カウンターの裏にあったナイフを手にすると、ママを引きずるようにして車に押し込み、両手のガムテープを外した。
「さあ、家まで運転してもらおうか。妙な動きしたら、ぶっ刺すぞ」
助手席でママの頬をナイフで叩きながら、脅した。アパートに着いて、部屋に上がりこむと、ナイフを首に突き付けて、言った。
「金庫から大事な土地と店の権利書、出してもらおうか」
　大きく目を見開いて涙を流しながら嫌々をして出し渋るママの様子にイラついた力は、

ママの頬にナイフを当てて、強く引いた。ボタボタと流れる血に身の危険を感じたママは震える指で金庫を開け、権利書を取り出した。力はそれをひったくるように取ると、じっと眺めた。
「これが権利書か。ママ、ありがとうよ」
力は持ってきたガムテープをママの両手両足に巻き付け、さらに風呂場からとってきた洗濯ロープでママの体をベッドの柵にしばりつけた。
「これで、しばらくは動けないだろ」
「ママ、死んでしまわへん？」
「二、三日、このままでも死にゃせんさ。連絡取れなくて心配になった知り合いが見つけてくれるやろ」
順子はママの悲しげな目を避けるように、力の影に隠れた。悪いことをしているとわかっているのに、力に従うしかない自分に動揺していた。
「順子、逃げるぞ。バーに戻って、荷物まとめて、こいつの車で出発だ」
二人はその夜はモーテルに泊まり、次の日、力の馴染みの店で権利書を金に換え、梅田に安アパートを借りて、新しい生活を始めた。力は手にした金を元手にして、居酒屋をしようと、梅田周辺で適当な物件を探した。大阪駅からほど近いビルがテナント募集していたので、力が交渉して、そのビルの地下一階に小さな居酒屋が持てることになった。順子は人から盗んだ金で商売をするのに抵抗はあったが、力に言われるままに開店準備に追われた。そして、居酒屋をオープンさせたのは翌年の春だった。

七、潔との再会

華々しく開店した当初は、開店特別サービスもしたので、ビルに入っている会社や近くの店の従業員らが仕事の帰りに寄ってくれたが、居酒屋の経営などまったく経験のない二人は行き当たりばったりの商売を続けた結果、半年も経つ頃には、夕方五時に店を開けても、八時に至るまでほとんど客が現れない状況になっていた。
「力、なんか考えないと、このままじゃ店、つぶれちゃうよ」
「梅田いうても、皆けち臭い客ばっかりや。飲む酒も安い焼酎一辺倒や」
「肴、工夫せんとあかんのとちがう？　おいしいもん出してたら、客も来るよ」
「ごちゃごちゃ言わんと、テーブルでも拭いとけ！」
最近商売がうまくいっていないせいか、力の機嫌は悪く、順子が商売に口出ししようものなら、所構わず平手が飛んでくる。母が言っていたように、殴られて育った人間はやはり殴るものなのだろうかと順子は絶望的な気持ちになる。それに、力は何事においても、先のことを考えず、その場しのぎで済ませてしまうタイプだということがだんだん分かってきた。それでも、順子は力と別れて、自分一人で生きて行こうとは思えなかった。力と一緒にいたかったのだ。
九時を回った頃、ボーッとテレビを見ていた順子は、店のドアがためらいがちに開けられるのを感じた。振り向くと、そこには仕事で疲れ切った若いサラリーマン風の男が立っていた。
「いらっしゃい！」

イスから飛び降り、とびっきりの笑顔で迎えた。男はコートを脱ぎながら、案内された席に座った。
「お飲み物は何になさいますか」
「焼酎のお湯割り、もらおうかな」
「はい。ご注文がお決まりになりましら、このベルを押してください」
「分かった」
男はパラパラとメニューをめくっていたが、さして興味を引くものがなかったのか、さっさとメニューを閉じて、順子を呼んだ。
「この店のお勧めは何？」
「お勧めですか。そうですね」
順子は頭をフル回転させて、きょうは何を仕入れてきたのか思い出そうとした。そうだ、タラの白子があったはずだ。
「タラの白子の酢の物はいかがですか」
「じゃ、それをもらうよ。それから串揚げとししゃももね」
「かしこまりました」
順子はできた料理を運びながら、男を観察した。彼は焼酎をちびちび飲みながら、料理に箸をつけている。体が温まってきたのか、小豆色のマフラーを外したとき、背広の襟につけてある名札が見えた。「水谷潔」という文字があった。順子は改めてその男の顔を見て、あの潔の面影を探した。無造作に短く刈り込んだ髪の毛、色白で細面の顔、箸を使う華奢な指。体全体から清潔な真面目さが滲み出ている。順子は懐かしさで胸がいっぱいになった。
「潔ちゃん、潔ちゃんなの？　わたし順子よ。覚えてる？　団地でよく遊んだ」
「えっ？　順ちゃん？」
男は目を丸くして、グラスを落としそうになった。順子は目に涙をためて、うなずいた。
「力と二人でこの店やってるのよ。力、呼んでくるわ」
順子は厨房に走った。
「力と？」
潔が首をかしげていると、調理場から力がキツネにつままれたような顔をして近づいてきた。
潔を一瞥して言った。
「俺の店にようこそ」
「梅田のビルに店を出すなんて、すごいじゃないか。がんばって資金作ったんだね」
「ああ、いろいろ苦労したよ。おまえは何をしてるんだ？」
「ぼくは小学校の先生になったんだ。まだまだ新米教師さ。今日はこの近くで教育セミナーがあって…。その帰りだよ」
「へえ、先生か。おまえ、真面目だったもんな」
「今は熊取の小学校に勤めてるんだ。小さな学校だから、みんな家族みたいに仲がいいんだ。子どもたちも素直だし」
「大学、行ったんだな？」
「ああ、母と姉が美容師しながら助けてくれたんだ。今も田辺で一緒に元気に働いてるよ」

「そうか。おまえの母ちゃん、しっかり者だったもんな」
力は昔を反芻するような遠い目をしていた。が、次の瞬間、目の前のスーツ姿の潔を目を細めるようにして、じっと見た。力の中に幼いころから燻り続けていた潔への嫉妬心がはっきりと形になって現れた一瞬でもあった。
「で、力のお父さんとお兄さんたちは？」
「あんなおやじ、縁切ってやったよ。兄貴らは何してるんだか。バラバラさ」
「そうか。順ちゃんお母さんは？」
「相変わらずよ。力と再会して、わたし、家出ちゃったから、三年ほど会ってないけど…」
「二人ともいろいろあったんだね」
「今は順子には俺がついてるし、二人でがんばってるよ」
「家族ができたんだね。よかった」
潔はしみじみと二人を眺めた。
「僕は今教えることを通じて、子どもたちとかかわることが面白くなってきたんだ。子どもたちを見ていると、どうにかしてひとりひとりの能力や可能性を伸ばしてやりたいと思う。各々の家庭は各々の事情や問題を抱えてるだろうけど、学校にいるとき、小学校二年生の子どもはみんな八歳の子どもなんだ。楽しく勉強させてやりたい。そして、生きていく上で大切なこと、少しずつ教えていきたいと思ってる。教師にできることって限られてるけどね」
「俺らみたいにしんどい境遇におる子どももいるやろうな」
「ああ、本当にいろいろな家庭があるよ」
潔は自分のクラスの生徒の顔を思い出していた。
「お互いやっと自分で稼いで生活できるようになったな。再会に乾杯しようぜ」
力は励ますように明るい声で言った。
力、二十五歳、潔、二十四歳、順子、二十一歳、三人の再会だった。

八、潔の献身

再会して以来、潔はたまに力の居酒屋に足を運び、三人で一緒に遊んだ思い出や力の順子の再会の話や潔の学校の様子など、とりとめのない話をした。十七年も離れていたのに、ずっと一緒にいたような居心地の良さを三人とも感じていた。ただ、いつ立ち寄っても、ガランとしている店の様子に、潔は聞きにくそうに口を開いた。
「この店、大丈夫？　客、入ってる？」
力は自信たっぷりに答えた。
「おまえが来るより早い時間帯に客がどっと来るんや。定時に仕事が終わった会社員が晩飯もかねて飲みに来てるみたいやな」
「そうか。そんならいいんだけど。晩飯のメニューって何があるの？」
「ホルモン鍋とかチゲ鍋とか」
「ふうん」
潔の腑に落ちない様子に、順子が何か言いたそうに身を乗り出した。それに気づいた力は順子に

「おまえ、洗物して来いや。ここで油売ってばかりいたらあかんやろ」と、席を離れるよう促した。
「心配するな。まあゆっくり飲んで行ってくれや」
そう言って、力もその場を離れた。虚勢を張る力の態度を不審に思った潔は、力のいない時を見計らって、順子に聞いた。
「実際のところどうなの？　この店、儲け出てるの？　きちんと収支とか出してるの？」
「そういうことは力がやってるはずだけど…。ただね、お客さん、入ってないの。去年の春オープンしたての頃はそこそこ入ってたんだけど、リピーターがいないし、特別サービスが終わると、お客さん、だんだん減ってきて、今じゃ日に四、五組って感じなの。やばいんだよね」
「僕に何かできることないかな？　経営のことは全然だけど、コンピュータのことなら少しは分かるから、役に立てると思うんだけど…。力は僕に頼るのは嫌かな？」
「たぶんね。プライドは高い人だから」
「でも、このままじゃ潰れてしまうよ。この辺の飲食店の競争、半端じゃないよ。せっかく手に入れた店だろ？　よし、僕が力に真剣に話してみるよ」
「そうね。力もこの店の現状を何とかしなくちゃって思ってるはずだし、潔のことは信用してるから、アドバイスに耳を貸すかもしれないわ」
それで、閉店後、客のいないときに、潔は力に問いただした。
「力、嘘つくなよ。この店の経営状態が悪いことくらい、誰が見ても分かるよ、何か対策練らないと。コンピュータできちんと管理してるのか」
「コンピュータなんかに頼らなくても、やっていけてるよ」
「今はどの店も店の売り上げなどの管理にコンピュータ、使ってるよ。ソフト、買って来て、データを打ち込んだら、収支はもちろん、よく出るメニューや飲み物、客の入る時間帯までわかるんだよ。そういうシステム入れて行かないと…。僕にも手伝わせてくれないか。三人でこの店の生き残りを考えて行かないか？」
「偉そうに！　経営の経験もないヤツに何を教わるって言うんだよ。おまえだって仕事あるだろ？　ひまか？」
「この四月に天王寺の小学校に移動になったから、すぐ寄れるよ。もちろん自分の仕事は優先するから、手伝うって言っても、コンピュータを導入して、店の経営に生かせるようなシステムを使える状態にするのが、差し当たり僕にできる仕事だと思う。この店の収支はどうなってるんだ？」
「そんなこと考えたこともない。持ち金で仕入れて客に出す、余ったものは捨てるのさ」
「それって、経営とは言えないだろ？　まず帳簿つけるところからだな。きちんとデータを入れて、分析しないといけないな」
潔は今までいい加減にしてきた金の流れを見るために、三か月しっかりデータを入力し、店の現状をあぶりだした。それから、店をリニューアルに向けて、いったん店を閉めて、再オープンを十月に設定し、堅実で健全な経営の基盤を作り上げることに努めた。
「お前に払う金はないぞ」という力に潔は言った。
「力から金を取ろうなんて思ってないよ。いい店になるよう手伝いたいだけだよ」
再オープンに当たっての資金援助も潔は惜しまなかった。細々と貯めた二百万円を力に

貸した。
「やるんじゃないよ。経営が軌道に乗ったら返してくれよ」
「当り前さ。利子つけて返すよ」
口ではそう言いながら、力にはそんな気持ちはさらさらなかった。
オープンを控えた九月の暑い夜、潔はオープンのイベントに関して詰めておきたいことがあったので、力のアパートを訪ねた。込み入った相談をするときは、力の部屋を使うのが常だったのだ。あいにく力は飲みに出かけていて、順子一人だった。
「じゃ、力のいるときにまた寄るよ。連絡せずに来たからね」
潔が帰りかけたとき、順子が
「せっかく来てくれたんだから、コーヒー、飲んで行って。おいしい豆、買ってきたの」
と潔を招き入れた。
「じゃ、一杯だけ」
潔は部屋に入り、ドアを閉めた。コーヒーを淹れている順子の長い髪の毛がエアコンの風でサラサラ流れている。時々見える額に切り傷が見えた。よく見ると、首や鎖骨の横に打撲の跡のような青あざが見られた。潔は順子の腕をつかみ、Tシャツの袖をめくり上げた。火傷の跡のような黒いボツボツが広がっている。
「順ちゃん、これ、力がやったのか？」
「たいしたことないよ。力、お酒が入ると、ちょっとね」
慌てて袖を下しながら、順子は力を庇った。
「順ちゃん、幸せなんか？」
「幸せって、分からないよ。ひとりぼっちは嫌だけど、力といても寂しい。わたしも力も親のようにはなりたくないって思ってたのに、おんなじ生き方してるみたいで…」
「順ちゃん、本当に自分の足で立ちたかったら、力から離れないとだめだと思うよ。小さい頃からの上下関係というか従属関係を断ち切らないと自立できないよ。本気で順ちゃんがそうしたいんなら、僕は僕なりにバックアップするよ」
「ありがとう。潔はいつも優しいね。わたし、どうして潔と…」
順子は潔の腕の中で少し泣いた。このまま温かい場所にずっといたい気がした。そのときドアが乱暴に開けられ、酔っぱらった力が玄関の靴を蹴飛ばしながら部屋に入ってきた。慌てて離れた二人を見て、力は顔をゆがめた。
「そういうことか。親切そうに近づいてきたのは順子が目当てだったのか。汚いぞ。俺のいないときに上り込んで」
「妙な勘繰りはやめてくれ。僕はただ順ちゃんがかわいそうで。力、おまえ、順ちゃんに手をあげたり、たばこ押し付けたりしてるだろ？」
「こいつ、気が利かねえんだよ。とろいしよ。俺といたくないんだったら、出て行っていいんだぜ。うんざりだ。陰気くさいおまえの顔は。潔、早くこの女、連れて行ってくれ」
力に追い出された二人は仕方なく潔のアパートに向かった。順子は着替えすら持たず、出てきてしまったので、次の日、潔は順子のために当座の生活に必要な衣類などを買い揃えた。
「しばらくここでゆっくりしたらいいよ。でも、自立するんだから、住むところを探さなくちゃだめだよ。それから、仕事もね」

「ずっと潔のところにいちゃいけないの？」
「だめだよ。そんなことしたら、力から僕に乗り換えただけになるだろ？　アパートの敷金とかは貸してあげるからね」
「分かった」
順子は一か月ほど潔のアパートにいたが、天満の方に安いアパートを見つけ、スーパーのレジの仕事も得て、出て行った。
潔は力の店のことも気になっていたが、顔を出すのはためらわれた。開店したての頃、こっそり様子を見に行ったら、活気のある声が聞こえてきたので、自分の役割は一応果たせたと思い、力の件からは手をひくことにした。というのも、潔は自分の職場で苦戦していたのだ。転勤した先の天王寺の小学校は前任校とは雰囲気が全く異なり、大きな学校で先生も生徒もみんなピリピリしていた。

九、教師

潔は三年生の担任をしていたのだが、その学年主任の米田という男性教師とはことごとくぶつかった。米田はアメリカの大学院で最先端の教授法を学んだとかで、何かとその理論を持ち出し、会議の席などでも、古参の先生方を尻目に、持論を主張し、若手、中堅の先生方の中でも中心的な存在だった。現在三十六歳でこの学校はもう五年目になる。今年の四月にここに移ってきたばかりで、先生としても経験の乏しい潔にとって手強い相手と言えた。
最初の衝突は、三年の担任による学年会議の席で起こった。米田は潔のクラスである三年二組と森本亜子先生の三年三組が算数や漢字のドリルに時間を割きすぎているのではないかと指摘した。
「単純な計算や漢字の書写にばかり力を入れていては思考力や創造力は育ちませんよ。同じ計算をするのでも、実際の生活で使うような状況を与えてやってこそ、やる気が出るというものです」
「実際の生活？」
「そうです。買い物でのお釣りの計算とか、クラスの生徒を五つに分けるとどうなるかとか」
潔は首をかしげながら、反論した。
「そんなシチュエーションをいちいちひねり出すのはどうですかね。実際自分でお釣りを数えることなんてないでしょう？　レジのおばさんがやってくれるし。算数は哲学に通じるものですよね。実際とはかけ離れた数の遊びみたいな。へんに実際の生活と結びつけると、概念の世界に進んでいけないですよ。小学校ではやはり、読み、書き、そろばんですよ。基本的な計算や漢字など体で覚える方が後々応用しやすいとは思いませんか。基礎力をつけることが大切です」
森本先生も潔の意見に賛同した。
「中学生で分数計算ができない子も多いと聞きます。分数で割るっていう概念を説明したところで、いったい何人の生徒が理解できるのでしょう。計算のルールとして紹介してやる方が混乱しないと思います。思考力はもっと違う勉強で培えばいいことです」

米田は二人に反論されて、苦虫をかみつぶしたような顔で言い放った。
「単純ドリルを重視していたら、学年末になってわたしのクラスの一組と学力の差が出てくると思いますよ。まあ楽しみにしています」
米田が苛立ちながら、会議室から出て行って、潔と森本先生が残された。三組の森本先生は潔より二つ年上で温厚で人望もあった。潔が本音で話せる貴重な同僚だった。米田の怒りを含んだ足音が遠ざかるのを聞きながら、潔は言った。
「米田先生って怖いですよね」
「よく勉強されてるし、正しいことをおっしゃってるんだけど、子ども一人一人を見ていらっしゃらないんじゃないかと思うこともあります」
「子供に関心がない？」
「というか、ご自分が学んだ教授法を実践なさるんですけど、結局子どもをどこに導きたいのか、何をもって子どもの実力がついたと評価するのか明確じゃない感じがします。だれだって、子どもたちの中に思考力や創造力を養っていきたいと思っているでしょう？」
「もちろんです。でもね、基礎がしっかりしていないと、応用はできないんですよ。計算力語彙力は思考の道具なんですよね」
「そういうことですね」
次の衝突は運動会の種目を巡って、全体会議の席で繰り広げられた。潔が何気なく提案した「かけっこ」と「クラス対抗リレー」と「騎馬戦」がやり玉に挙がった。米田はこれらの競技の不適正さを力説した。
『かけっこ』はみんな全力で頑張ってるのに、その頑張りに対して順位をつけるということですよね。頑張りは平等に評価してやるべきでしょう。『クラス対抗リレー』はむやみに競争心を刺激して協調性を損ねるものですし、『騎馬戦』にいたっては、危険であることもさることながら、戦いを推奨するような野蛮な競技を学校教育の一環である運動会で行うのはいかがなものでしょう？」
「お言葉ですが、スポーツというものは戦いが昇華したものです。フットボールなんてボールじゃなくて敵の大将の生首でやってたみたいでしょう？　スポーツは戦いだし、戦いには勝ち負けがつきものです」
「何もスポーツの起源を云々しているのじゃないでしょう？」
「スポーツの本質を言ってるのです。それに、子どもたちはそれぞれ、いろんな能力を持っています。算数が得意な子、絵をかくのが上手な子、ピアノが好きな子。みんな評価されていますよ。足の速い子が運動会で評価されてもいいじゃないですか。正当な評価を与えることは、その子の能力や素質を伸ばすことにつながると思います」
「足の遅い子はみんなの前で恥ずかしい思いをすることになるんだよ」
「それはその子が受け止めるしかないですね。ちょっと辛いかもしれないけど、それくらい我慢しなくちゃ強くなれませんよ。世の中勝負と評価の繰り返しですよ」
すると、他の先生から反対意見が出た。
「それは強いものの言い分ですね。教育の場では弱いこの立場になって考えるスタンスが求められると思います」
「そうですね。どの子もその子なりに頑張っているんだから、その努力を平等に評価してやらないと。小学校で実社会の縮図を作る必要もないのですから」というような意見が相

次ぎ、結局「かけっこ」も「騎馬戦」も認められず、「クラス全員によるリレー」をすることになった。だれが早いのかもどのクラスが一番を走ってるのかも分からないし、何らかの理由で特別足の遅い子がいるクラスは初めから勝負をあきらめるしかないような応援のし甲斐のないリレーとなった。

潔は森本先生を食事に誘った。ついつい愚痴が出てしまう。

「かけっこで順位をつけることもだめになったし、テストでも百点評価じゃなくて正解した数だけ記入することになるなんて。なんか子どもたちの顔が輝く瞬間が奪われてるような気がしませんか？　僕は子どもの頃百点取ったらうれしかったし、母にそれを見せるときは誇らしかったな。かけっこはあんまり速くなかったから、運動会は好きじゃなかったけど、いつも教室の隅っこで静かにいる子がかけっこでぶっちぎり一等になるの見て、すごいなって見直したこともあったよ」

「あら、そうなの。いつもかけっこ一番だったのかなって思ってた」

「僕、勉強はまあまあできたけど、運動はすっとこだったよ。球技とか最低さ。耐久力がものをいうマラソンは人並みだったけどね。苦手なことは下手くそだし、やりたくないけど仕方ないよね。みんな、平等、平等って、平等って言葉が絶対正義みたいな顔してるけど、実体のない欺瞞の塊みたいな言葉だよ。平等なんてあり得ない、人間、生まれてから死ぬまでずっと。どこで生まれるかが一番不平等だよね。日本で生まれるか北朝鮮で生まれるか、両親の財力、知性、容姿の美醜、初めから平等じゃないよ」

「そうね。だから、みんな同じになんてムリよね。みんな違うってところから始めないと」

「先生たちってなんか胡散臭い」

「えっ？」

「うそつきって気がする。平気な顔をして嘘をつくっていうか、もしかしたら、嘘だと自覚してないのかも」

「先生たちって割といい子ちゃんたちが挫折も経験しないで自分のクラスの支配者になった人が多いから、マスメディアに先導された主流の考えに疑いを持たないのかもしれないわ」

「偏狭な真面目さが怖いよね。僕は先生に向いていないのかもしれないな」

「いろんな考え方、いろんなタイプの先生がいていいんじゃないのかな」

「そうかな」

ちょうどこの時期、潔は力と順子を挟んでもめて、心ならずも順子と一緒に生活している状態だった。学校でも異分子のような自分の存在をひしひしと感じる毎日で、自分の心が折れないようにするのに精いっぱいだったのだ。そんな潔に追い打ちをかけるような出来事があった。

年明けの恒例行事になっている発表会の企画会議でのことである。三年生は日本の昔話をテーマにした劇を各クラスで行うことになった。潔のクラスは「桃太郎」をすることになっていた。物語を少し現代風にアレンジするのに、生徒と知恵を出し合って完成させたシナリオを会議に持ってきたのだが、それが米田の気に入らなかったようだ。

「このシナリオだと、登場人物は、桃太郎、おじいさん、おばあさん、犬、猿、雉、あと鬼が五人、計十一人ですね。クラス三十五人の半数以下ですね」

「あと、大道具、小道具、衣装や照明、音など裏方の仕事がいっぱいあるし、それはそれ

でおもしろいと思います」
「保護者が見に来るんですよ。みんな、自分の子どもが舞台に出るのを楽しみに来るんじゃないですか」
「裏方だって重要です。劇の終わりに全員ステージに上がって紹介します。いろんな役割を分担して、その役割をそれぞれが一生懸命全うして、みんなで一つのものを作り上げるってことが大切じゃないですか」
「みんな平等にスポットライトを浴びるべきだと思いますよ。主人公の桃太郎を五人で分担するとか、五人兄弟にするとかできるでしょう？　犬だって猿だって増やせばいい。道具類はみんなで用意できるし、裏方も手の空いた生徒の持ち回りにすれば、全員ステージに立つことも可能になりますよ。それに、鬼をやっつけるっていうのはどうかな。力でねじ伏せるってやり方は感心しないですよ。やはり話し合いをして、鬼が悟る形にもっていったほうが」
「はあ？　鬼と話し合い？」
潔はあまりの提案にあいた口が塞がらなかったが、他の教員は米田に賛同した。
「それは斬新でおもしろいですね。民主的で平和的でいいですね」
ここで、亜子先生が潔に助け船を出した。
「それじゃ、話が全然違ってしまいます。伝統的な勧善懲悪の昔話じゃない。わけがわからないお話になってしまいますよ。なんのために日本の昔話を題材に選んだのか、それさえも見えません」
「いいじゃないですか。昔の話に固執することはないでしょう」
潔は、発表会の当日、五人の桃太郎と五匹の犬、五匹の猿、五羽の雉、十人の鬼が出演し、話し合いで鬼が改心する劇を見ながら、全身の力が抜けていくような感覚を味わった。妙に真面目に自分たちの正義を信仰する教師集団にいると、頭がおかしくなりそうだった。発表会が終わったあと、誰もいなくなった講堂で森本先生に思いのたけをぶちまけた。
「僕は負け犬だよ。自分の信じることを根気強くきちんと発信していくべきなんだろうけど、そんな気力が出てこない。小学校という組織、先生という人種に絶望してしまった。平等とか平和とかありもしない幻想を生徒に押し付けて、いったい何が得られるのだろうか。今みたいなことを続けていたら、子どもたちはどんどん無気力に無能になっていってしまいそうな気がする」
「で、どうしたいの？　もう先生、やめちゃうの？」
「やめたら、すっきりするだろうけど、やめてはいけないと僕の良心が言っている」
「運動会とか発表会とか学校行事は目立つし、アピール性もあるけど、それらは学校生活のほんの一部でしょ？　毎日の授業で取り組めることもあるはずよ」
「たとえば？」
「地元にまつわる民話を集めてこさせて、発表するのはどう？　おばあさんやおじいさんに聞いてもいいし、図書室で探してもいいし」
「なるほど。紙芝居にして発表させることにしたら、絵のうまい子や文章を書くのが得意な子がリーダーになれる」
「二、三人でいろんな職業について調べさせるようなタスクもおもしろいかも」
「社会勉強にもなるし、働くことに対して敬意を持つきっかけにもなるね」

「もちろん単純で軽視されがちだけど、ドリル練習もおろそかにできないわ」
「たまに漢字ドリル大会や計算ドリル大会をして、優勝者を決めてもいい」
「そうそう。日々の地道な活動を通して、子どもたちの基礎力を養い、考える力も育てる工夫はいろいろあるわ」
「なんだかワクワクしてきたよ。やっぱり森本先生に話を聞いてもらってよかった。先生は他の先生と匂いが違うもの」
「匂い？」
「うん、臭くない」
「何、それ。わたしのこと、あんまり知らないくせに」
「そういえば、そうですね。二歳年上つてことしか知らないな。よし、今度の日曜、デートしましょう！」
「なんでいきなりデートなのよ？」
「学校以外での森本亜子が見てみたい。どっか行きたいとこ、ない？」
「そうね。だったら、お城に行きたいわ。わたし、お城めぐりが好きなの」
「じゃ、和歌山城はどう？　戦争で焼けて、ずいぶん小さくなっちゃったけど、徳川吉宗の城だよ。僕は和歌山出身なんだ」
「へえ、近いけど、行ったことないわ」
　二人はこうして時々お城デートをするようになった。有名な姫路城から地元密着型の岸和田城まで、あちこち出かけた。亜子は学校とは別人のように生き生きと城についてのうんちくを語り、潔はニコニコと聞いていた。
「何？　なんで笑ってるの？」
「何でもないよ」
　潔は心の中でかわいいんだものとつぶやいた。
　四月になって、潔は四年生の担任になった。亜子と出し合ったアイデアを次々実践してくと、子どもたちは少しずつ自主的に物事に取り組みだした。お互いに評価し合うのが効果的だったようだ。漢字力も計算力も確実についてきている。高学年になっても困らないだけの力をつけてやりたいという潔の思いを子どもたちもしっかり受け止めているようだった。新しい学年、新しいクラスで自分の企画が軌道に乗ってくると、潔にも余裕が出てきた。余裕が出てくると、子どもたちのこともよく見えてきて、学校が楽しくなってきた。また、クラスマネッジメントがうまくいっている潔のやり方を真似る先生も出てきた。

十、潔の決意

　ポカポカ陽気の初秋の日曜日、潔は掃除、洗濯を終え、久しぶりにベランダに布団を干していた。真っ青な空が広がっている。ふと下を見ると、アパートの前に顔見知りの男と女が立っていた。二人は太陽を背にして潔の方を眺めている。潔は嫌な予感を振り払うように明るい声を出した。
「力と順ちゃん、一緒なのか？」
「ああ、ちょっと話があるんだ。出てこられるか？」
「今、行く」

二人と関わっていたのはずいぶん昔のことのように感じたが、まだ一年ほどしか経っていないことに気が付いた。近くのファミレスで三人は向かい合っていた。力と順子は疲れているのか、二人の周りの空気だけ動かず澱んでいる。潔は答えは想像できたが、聞かずにはいられなかった。
「順ちゃんは力と別れて、自立の道を選んだんじゃなかったのか？」
「わたし、やっぱり力がいないとダメみたい。あれから二か月ほどして、また力のとこに戻っちゃったの、寂しくて」
「そうなんだ」
潔は言い知れぬ虚無感に襲われた。
「それで、力の店の方はうまくいってるのか？」
「リニューアルしてオープンしたての頃は結構客が入ってたんだ。おまえと考えた日替わりランチメニューを目当てに、昼休みにビジネスマンやＯＬが来てくれた。だけど、三か月経ち、半年経つと、潮が引くみたいに客が減っていった。店、開けといたほうが赤字がかさむし、先月売ってしもたんや」
「僕の言った通り、きちんと収支入力して分析してたのか？　新鮮な野菜を使った料理を充実させるようにとも言ったよな」
「面倒くさくってよ。俺、数字アレルギーかもな」
潔は二人が生き直せるならと自分にできる精一杯の支援をしたつもりだった。コツコツためた貯金も貸したし、自分の持っている知識も投入したのに、結局すべて無駄だったのかと唇をかんだ。
「それで、今日は何？」
「少し金貸してくれないかと思って」
「まだ貸した金も返してくれていないじゃないか」
「あれは、くれた金だろ？」
「あの時渡した二百万は僕の貯金の全部だったんだよ。どっかから金が湧いてくるとでも思ってるのか？　僕は安月給の教師なんだよ」
「そうかな。あのアパートの家賃、安くはないだろ？　故郷で姉ちゃん、ずっと美容師してるんだから、かなりため込んでるんじゃないのか」
「どうして姉の金なんかおまえが当てにするんだ？」
「おまえが貸してくれないんだったら、姉ちゃんに頼むしかないだろ？」
「そんな義理ないよ」
「そうかな。おまえ、順子としばらく一緒に暮らしてたんだってな。そのとき、置いてやってるからって、無理やり順子を何度も抱いたそうじゃないか。順子が泣きながら、俺に話したよ。その慰謝料っていうかさ、わかるだろ？」
「順ちゃん」
潔は信じられないといったふうに、順子を見た。順子はうつむいたまま、ボソッと言った。
「潔のこと信用してたのに…」
「僕はそんなこと、していない！」
「おまえ、小さい時から順子が好きだっただろ？　好きな女と一つ屋根の下にいて、何も

ないなんて誰が信じるか！」
「僕はおまえとは違うんだ。自分の常識で他人の行動を決めつけるな！」
「おまえは聖人君子か？　人間なんて、みんな己の欲のためなら何だってするもんさ」
「それはおまえの論理だろ？　幼いころのおまえの家庭環境はひどかった。自分の命を守るために悪いこともせざるを得なかったことは理解できる。同情もするよ。暴力の連鎖を断ち切るには、ものすごくエネルギーが要ることも想像にかたくない。でも、君らはそこから抜け出すために何か努力したのか？　親のことを憎みながら、今君らがしているのは親の生き方そのものじゃないか？　僕たち三人は子どもの頃辛い時間を共有したから、互いのことが分かりあえると思ったのは幻想だったのか。二人には誰よりも幸せになってほしいと思って、自分自身の足でしっかり立てるように僕なりに助けたつもりだったのに、そんな僕の思いに対する答えがこれなのか？　僕を暴行罪で訴えたいなら、そうすればいい。僕はどこにも逃げないよ。ただ、僕にはもう君たちに施す心も金も残っていないよ。君たちの顔は二度と見たくない。関わりあいたくないんだ。母や姉に迷惑をかけるようなことをしたら、絶対許さないよ。それだけは覚えといてくれ」
「偉そうに。甘ちゃんのおまえに何ができるっていうんだ。これで終わりだと思うなよ！」
力は潔を睨みつけると、順子の腕を乱暴にひっぱって、席を立ち出て行った。
潔は怒りを通り越して悲しかった。生まれ育った環境が人の生き方を縛ってしまう事実を突き付けられて、せつなかった。生きる上での基盤となるものが「悪」や「従属」である場合、人はどうしたら、そのメビウスの輪から逃れられるのだろう。二人に決別を告げて、寂しさよりも安堵する気持ちの方が大きいことも辛かった。
潔は身を引き締め、自分自身に誓った。
これまで自分を支えてくれた母や姉の恩に報いるためにも、今いる場所、教師という仕事を大切にしていこう。子どもたち一人一人が日本のを明日を担うのだから、教師はニュートラルを心がけ、良心に恥じるような行為をしたり嘘をついたりせず、生徒が自分自身に誇りが持てるような人間に成長するよう手助けしよう。
ファミレスからの帰り道、物思いにふけりながら、アパートを目指していると
「潔さあん！」と呼ぶ声が潔を現実に引き戻した。振り返ると、手を振る亜子の姿が見えた。今日初めて部屋に招いたのだった。潔も大きく手を振って、満面の笑みを浮かべた。

〈了〉

参考
「同時にわかる日本、中国、朝鮮の歴史」小口彦太監修　造事務所編著
「中学生に教えたい日本と中国の本当の歴史」黄文雄
「韓国人に教えたい日本と韓国の本当の歴史」黄文雄
「黄文雄が呉善花、石平に直撃　日本人は中国人・韓国人と根本的に違う」黄文雄・呉善花・石平